

市場競争において競争はいい？仕方ない？悪い？どれ？？？

就職試験で聞かれたらいいといった方が通りやすいのでそう答えるように。それで、もう一度授業を整理する。

援助の話をするのだけれど、テキストは「アジア産業クラスター論」書籍工房早山 というのを使う。最初に話すのはこの中でも「経済学」という視点から、もう少し細かくいうとミクロ経済学とマクロ経済学を話す。春はマクロで徐々にミクロになっていく。冬に向けてミクロにいけるようにやるよ。式は中学程度の知識で何とかできるようにします。

競争が良いか悪いか、を何のために話したかということ、中国の産業政策（167 頁）を分析する際に重要になるということであった。中国は 1988 年に産業政策司というところを作った。これが世界から大きな注目を浴びた。どちらかという国の保護の下に産業を育成するというものである。1992 年に南巡講話というものがあった。もう一つ同時に行われたのは、WTO 加盟である。これは産業政策とは反対側の、競争という考え方である。つまり、同時に競争と保護が同時に取り入れられているということである。お互いに拮抗して綱引きをするのである。では日本は今どっちが強くなっているかというと、小泉の時は競争だったのだが、福田になって保護になった。

中国でいうと、2001 年に WTO 加盟をする。このきっかけになったのが、1997 年のアジア通貨危機である。これは 7 月 1 日にタイのバーツが大暴落したというもの。テキストでいうと 220 銭。それで、どういう原因で暴落したのかというのが問題なのである。タイのバーツが切り下がったということは、1 ドル 100 円だったのが 1 ドル 130 円になるということである。これが 100 円から 200 円になるという状況で、貯金が 100 万円あったとすると、1 ドル 100 円だったら 1 万ドルになる。しかし次の日 1 ドル 200 円になっていたら、貯金は 5 千ドルになる。つまり、バーツがこのように大きく変動するという事態がアジアで起こったのである。

ではこれがどうして起こったのか。これが問題なのである。大きくいうと二つ理由がある。一つは投機。もう一つはファンダメンタル。投機というのは簡単に言うと博打である。マネーゲームね。投機は英語で speculate。熟考するという意味。よく考えて博打をするということ。この時有名になったのが、ジョージ・ソロスという人と、マレーシア・マハティール外相。この時大暴落したのはタイ・マレーシア・韓国・インドネシア。この大暴落は資本主義という考え方、競争という考え方に大きな問題があった。ジョージ・ソロスという人がタイの通貨をどんどん売ったのでタイの通貨が切り下がった。Hedge fund はお金持ちからお金を集めて、シカゴやニューヨークなどの商品取引所で小麦を買うのである。そして、安く買って、高く売るということをするのである。こうして利益を得るのが投機で

ある。マハティール外相はそういうのはよくないということで競争・資本主義を辞めさせろといった。これがきっかけとなり暴落が起きた。

アメリカではアジア通貨危機をどういっているか。韓国の経済が非常に悪くなった。この時に日本も非常に悪くなった。インドネシアも。アメリカの学者はこれをクローニイ・キャピタリズムといった。これは産業政策が失敗したからなのだという説明をした。つまり保護主義が良くなかったのだという説明をした。どういうことか。例えばインドネシアはスハルト大統領という人がいるが、産業政策をやるとどうということになるか、汚職になるのだといった。それで汚職をやめるためにはどうすればいいかというと、競争だけにすれば良いという説明をした。これがクローニイ・キャピタリズム。

第二の原因

ファンダメンタル：fundamental…基礎的な。

というのは、為替レートの根本を決めるのは貿易収支である。貿易収支というのは輸出から輸入を引いたものである。為替レートが切り下がる、減価するのは「輸出●輸入」どっち？減価するときというのはつまり、日本円が必要になるときである。つまり、輸出が輸入を下回るとき「輸出<輸入」である。というのは、国家の収入が支出を下回れば破綻してしまうので、そういえるのである。

輸出－輸入

IMF＝ $\frac{\text{輸出－輸入}}{\text{GDP}}$

GDP

であるし、 $GDP = C + I + X - M$ （消費＋投資＋輸出－輸入）であり、変形すると

$X - M \rightarrow \text{マイナスになるので}$

―――<IMF となり、通貨危機であると言える。

GDP

ベトナムなど、通貨が暴落する恐れがある国の人は、銀行になんてお金を預けずに、金にかえて補完したりするのである。そういうおかげで今金はレートが上がっている。要は、為替の問題が起こる時というのは、

輸出－輸入

IMF＝ $\frac{\text{輸出－輸入}}{\text{GDP}}$

GDP

が－8%より低かったから暴落が起きたんだという判断を IMF はした。どういう仕組みかというと、

例えば収入が10万円、支出が15万円とするとマイナス5万円の赤字になっている。んで家庭（GDP）は50万円だとすると、－10%となるということである。（5/50）

式に表すと以下のようなになる。

$$\frac{10 \text{ (収入 X)} - 15 \text{ (支出 M)}}{50 \text{ (GDP)}} = \frac{-5}{50} = \frac{-10}{100} = -10\%$$

IMF は－8%は重病であるという判断をするということなのである。

じゃあなぜタイ・マレーシアのが暴落したのか。1986 年にプラザ合意というのがあった。これで円高にしようという合意をしたのである。当時 1 ドルが 250 円くらいだったので、1 ドルを 100 円にしようということになった。そうしてアメリカ市場との均衡を図るのがプラザ合意であった。しかし、こうなると日本で今まで 4 ドルで売れていたシャツが 10 ドルになった。そうすると、日本の会社社長連中はアジア進出を考えるようになった。そして進出が始まったのがタイ・マレーシア・インドネシアであったのである。そうすると、日本からアメリカに 4 ドルのシャツを輸出していたところを 10 ドルになった。そうするとタイから輸出しようということになった。タイから低賃金でコストダウンを図れるので、タイからアメリカに 6 ドルで輸出できるようになった。すると、タイからの輸出はどんどん増える。ところが、この流れは長くは続かなかった。それでアジア通貨危機が起きたのである。というのは低賃金を求めてタイに出てきた日本企業。日本企業がいっぱい進出してくると、賃金は上がり始めたのである。すると今度はどうするか。賃金が上がり始めたらタイへの進出は打ち切りとなり、今までの輸出がとまることになる。そうすると IMF の式はマイナスの度合いが大きくなって大暴落に繋がってアジア通貨危機を招いたといえるのである。

もう少し学問的な話をすると、 $GDP = C + I + X - M$ （国内総生産＝消費＋投資＋輸出－輸入）は供給と需要の関係、つまり売りと買いの関係を表している。これに外国が入り込んできたときに、輸出は外国からの需要なので左に、輸入は外国からの供給なので右にくる。それを整理すると $GDP = C + I + X - M$ （消費＋投資＋輸出－輸入）となるのである。

今重要なことは、 $GDP = Y$ とすると、 $Y = C + I + X - M$ （消費＋投資＋輸出－輸入）のうち、「 $X - M$ 」を GDP でわると、それがまさに為替レートの

$$IMF = \frac{\text{輸出} - \text{輸入}}{GDP}$$

になるということを覚えていてほしい。詳しくは次回やる。